

甲骨文研究の道程と課題

—宗教学的研究の可能性—

田宮 克真

1. はじめに

甲骨文とは、紀元前 16～11 世紀頃に中国の黄河中流域に存在した殷王朝で行われた占卜の内容を、その占卜に用いた加工した亀甲や獣骨に記録したものであり、最古の形態の漢字文の 1 つである。19 世紀末の発見以来、甲骨文は歴史学・考古学・文字学などを中心に幅広い分野で重要であり続け、数多くの学者たちによる研究がされてきた。その成果は、郭沫若を中心に編纂され、1977～1982 年にかけて発刊された著録《甲骨文合集》全 13 冊などに大成されるが、《甲骨文合集》以後も依然として甲骨文研究は盛んであり続けている。従来の研究はもちろん、20 世紀後半の西周甲骨や殷墟花園莊東地甲骨などの新たな発見によって、甲骨文研究はまた新たな課題に直面し、かつ多角的な研究の可能性が開かれているといえるであろう。

甲骨文は、占卜行為に用いられたものであり、占卜内容を記録したものであるから、当然それ自体として宗教的性質を備えた遺物であり、中国宗教世界の原初の様相に迫る手がかりとなりうる貴重な資料である。しかしながら、本誌『宗教学年報』や『宗教研究』といった宗教学の学術雑誌に甲骨文に注目した研究が投稿されることは非常に稀である。かつては池田末利や池澤優が甲骨文に関する研究に取り組んでいたが、現状において、甲骨文、もっと言えば中国自体への宗教学での注目度はさほど高くないというのが実情であろう。しかし、筆者はそうした現状を良しとしない。言わずもがな、中国と日本は歴史的に緊密な関係を持ってきたのであり、その中国の宗教的現象の源流を辿ることの日本における意義は失われるものではない。また、中国、ひいては東アジア地域の宗教的文化が、西洋の伝統宗教などと著しく異なる特徴を備えており、比較研究を 1 つの重要な要素として持つ宗教学において意義深い研究対象であることも、ここであえて説明するまでもないことである。ゆえに、中国における占卜や祭祀という宗教的行為の最古の文字による記録である甲骨文の研究は、当然一定の精力を傾けられるべきものであるというのが筆者の考えである。

そこで本稿では、甲骨文研究についてサーヴェイした内容をまとめ、その道程を宗教学という分野で紹介すると共に、現在の甲骨学研究の課題を提示し、宗教学にとって実に魅力的な研究対象であることを示したい。

今回の甲骨文研究のサーヴェイ、特に《甲骨文合集》以降の研究のサーヴェイにおいては、各種のデータベースや文献の他、『史学雑誌』が毎年 5 月に発行している「回顧と展望」号の研究動向報告及び、『中国考古学』に毎年収録されている「中国考古学関係文献目録」を大いに参考にした。また、中国の論文に関しては、中国論文データベース CNKI⁽¹⁾を中心に用いてサーヴェイを行った。CNKI には 1980 年代以降の論文が数多く収録されているが、国外からの閲覧が制限されているものや全文がまだ公開されていないものも含まれており、また古い年代の論文は収録数が少ないなど

の問題が存在したことは先にことわっておく。欧米の研究は雑誌 *Early China* を中心にサーヴェイしたが、こちらも決して網羅的なものではない。ただ、今回はあくまで概観的な研究の紹介を目的としたものであり、ここに述べたいいくつかの問題を解決した網羅的なサーヴェイは、また別の機会の課題とすることをご了解いただきたい。

2. 甲骨文の研究史

甲骨文研究は多種多様な分野に広がって行われており、かつその研究手法や関心の向く先も様々であるため、包括的な研究史の記述を行おうとすれば、かえって煩雑で散漫になりかねない。そこで本稿では、「2-1 各地の甲骨文研究史」、「2-2 綴合・断代・字积等の研究」、「2-3 祭祀・占卜・神など宗教的内容に関する研究」の3項に分割して甲骨文の研究史を記述していく。2-1 では、甲骨文発見以降、中国・日本・欧米の各地で行われた主要な甲骨文研究を、年代順に追っていく。いわば「縦の整理」である。対して、2-2、2-3 では、研究手法や研究内容によってピックアップした研究を紹介する。いわば「横の整理」である。2-2 では出土文字資料研究に不可欠な諸作業に関する研究を、2-3 では宗教学に関連するようなテーマを掲げた研究を、それぞれピックアップした。

2-1 各地の甲骨文研究史

①中国における研究

19世紀末、当時清の国子監祭酒であり金石文の愛好家でもあった王懿榮とその食客劉鶚が、とある薬店でマラリアなどに効くとされた“竜骨”と呼ばれる骨片を購入したところ、その表面に、従来最古の文字とされていた西周金文の文字よりもさらに古拙な文字を発見した。王・劉両氏はこの刻字竜骨の収集と解読に努め、まさに『書』や『史記』に語られる殷王朝時代の遺物であると確信するに至った。いかんせん話が出来すぎており、現在ではこの逸話は事実かどうか疑問視されているが、ともあれこれが甲骨文字発見の経緯であったという。

発見の直後、中国を襲った義和団事件の混乱の中で王懿榮は井戸に身を投げ自殺してしまうが、劉鶚は彼の研究を引き継ぎ、収集した1,058片の拓本を1903年に《鉄雲蔵龜》として発表した。この本を経学・金石学の大家であった孫詒讓が目にし衝撃を受け、解読・研究を試みて翌年に著したのが《契文舉例》である。この2冊の本の出版により甲骨文の存在が世に広く知れ渡るとともに、その研究の端緒が開かれることとなった。

甲骨文の発掘と調査は、劉・孫両氏と親交のあった羅振玉による功績が大きい。当初は、薬店に竜骨を斡旋していた骨董商の証言などによって甲骨の出土地が曖昧に推測されるに留まっていたが、羅振玉の調査によって河南省安陽市小屯村付近から出土することが突き止められると、殷墟と呼ばれたこの地の発掘により大量の甲骨が発見されることとなった。羅振玉はこれらを1913年の《殷虚書契》などの拓本として刊行する他、解読にも心血を注ぎ、1914年には《殷虚書契考釈》を発表するなどの成果を報告した。

この時期の他の甲骨文解読の研究者としては、王国維が挙げられる。王国維は羅振玉の高弟であり、彼と並ぶ甲骨文解読の大家であるが、1917年に発表した〈殷卜辞中所見先公先王考〉^②で、甲骨文中に現れる殷王の祖先神の系譜が、『史記』殷本紀の記述と大部分一致することを示した。これ

により、劉鶚、孫詒讓らが唱えていた「殷墟甲骨文は殷王朝時代の一次資料である」という説が立証され、それまで疑われていた殷王朝の実在が証明されると同時に、甲骨文の出土資料としての価値を決定的なものとしたのである。

その後 1928 年に中央研究院が成立すると、殷墟においても中央研究院の主導によって大規模な発掘調査が行われることとなったが、この発掘調査の責任者となったのが李濟、そして董作賓であった。発掘調査は 1928 年から 1937 年まで、15 次に渡って断続的に行われ、その成果は《殷墟文字甲編》^③、《同乙編》^④、《同丙編》^⑤に収録された。特に 1936 年から 1937 年にかけて行われた 13 次～15 次発掘で、発掘調査が行われた宮殿基址南の 127 坑から 17,000 点余りの甲骨が出土し、また完全な状態の刻字亀甲が発見されたことは特筆すべき成果であった。こうした発掘の成果を元に、甲骨研究に大きな成果を残したのが董作賓である。董作賓の研究で最も有名なのは、1933 年の〈甲骨文断代研究例〉^⑥における甲骨の断代及び、1945 年の《殷曆譜》^⑦などで行った殷王の曆譜と「五祀周祭」と呼ばれる殷の祭祀制度の復元であろう。断代とは各甲骨文がどの殷王の時代に製作されたものかを明らかにすることであり、必然的に各殷王の系譜と在位した年代、すなわち曆譜の復元が不可欠である。董作賓は甲骨文の「貞」字の直前に記される一字が「貞人」、すなわち占トを行った祭祀官の名称であると同定した他、書風・書体の違いや祖先神の称谓など 10 個の指標によって甲骨を各殷王の時代と符合させ、それらを 5 期に区分することに成功した。また、そのうち第 1・3・4 期と、第 2・5 期の甲骨にそれぞれ共通する特徴が多く見られることから、前者を「旧派」、後者を「新派」と名付け、この 2 派による様式の革新と復古が行われたとした。董作賓の断代研究及び曆譜の復元には後続の研究によって現在では批判・訂正された部分も多く存在するものの、歴史的研究において資料の断代研究及び曆譜復元の先駆者となり、そして残したその功績の価値は計り知れないものであるといえよう。

その後、日中戦争及び国共内戦の混乱に甲骨文研究も巻き込まれ、董作賓は台湾へと逃れることとなったが、郭沫若、陳夢家、胡厚宣といった研究者は大陸に残り研究を続けた。中でも、陳夢家が 1956 年に著した《殷墟卜辞綜述》^⑧は甲骨を総合的に研究したものであり、現在でも参照される甲骨文の概説書となっている。

1960 年代から 1970 年代にかけては、李孝定、張光直、李学勤らの研究者が輩出するも、文化大革命の影響で再び中国における研究は大きな打撃を受けることになった。その中でも資料整理の作業は継続され、中国社会科学院考古研究所による《甲骨文編》^⑨が発表された他、台湾でも李孝定編《甲骨文字集釋》^⑩、嚴一萍《甲骨綴合新編》^⑪、同《甲骨綴合新編補》^⑫などの成果が発表された。これらの資料整理・研究の集大成こそ、郭沫若らを中心に編纂され、1977 年に発行された著録《甲骨文合集》^⑬であった。《甲骨文合集》は、それまで各研究者・研究機関が独自に収集・発刊していた甲骨の拓本を集成し、年代や内容に応じて整序したものであり、甲骨文資料へのアクセス性を飛躍的に高める一大成果であった。《甲骨文合集》以降も新たな甲骨の発見・発表は続き、現在では未収録の甲骨も再び増えてきているが、それでもなお《甲骨文合集》が研究上果たす役割は大きなものであるといえる。1999 年には、資料としての質の面の問題などから《甲骨文合集》に収録されなかった甲骨片や、《甲骨文合集》以降に発見・発表された甲骨片を収録した《甲骨文合集補編》^⑭が発表されている。今後も増えていくであろう甲骨文資料も、このように随時集成されていくことが望まれる。

②日本における研究

中国で発見された甲骨を日本に最初に紹介したのは、当時東京高等師範学校の教授であった林泰輔であろう。林は日本に甲骨の実物が輸入されると『史学雑誌』第 20 卷 8・9・10 号に、日本初の甲骨研究論文となる「清国河南省湯陰県発見の亀甲牛骨に就きて」⁽¹⁵⁾を發表し、1917 年には『亀甲獣骨文字』⁽¹⁶⁾を發刊して、日本の学会に甲骨文という資料の重要性を知らしめた。これと同時期に内藤湖南や富岡謙蔵といった中国学者も甲骨文研究に参加しており、甲骨文は日本でも大きなインパクトを持って迎えられたといえる。

戦後には数多くの学者が甲骨文研究に参加することになり、貝塚茂樹、島邦男、池田末利、白川静、赤塚忠、伊藤道治、松丸道雄ら高名な学者たちによって、文字学、考古学、歴史学など様々な分野での研究が行われた。特に島邦男の『殷墟卜辞研究』⁽¹⁷⁾は陳夢家の『殷墟卜辞綜述』の日本版とも言うべき総合的な研究であり、日本語の概説書として現在でも有用である。島邦男はその研究で使用した資料の整理にも精力的に取り組み、甲骨文の索引である『殷墟卜辞綜類』⁽¹⁸⁾を編纂した。

1951 年には日本甲骨学会が結成され、会報『甲骨学』が創刊される。ほぼ年に 1 回のペースで發刊され、甲骨文・金文研究の巨人・白川静の文字学的研究や、赤塚忠や伊藤道治らによる祭祀研究など、数多くの研究がこの誌上に投稿された。しかし、1960 年頃から發刊が途切れがちになり、1980 年の第 12 号を最後に休刊し、以降は史学系・考古学系の各雑誌等に研究が投稿されることとなった。

③欧米における研究

甲骨文の欧米でも早くからその存在が知られ、イギリスのジェームズ・M・メンジスの《殷墟卜辞》⁽¹⁹⁾や、フランク・H・シャルファンが模写し、ロズウェル・S・ブリトンが編集した《庫方二氏蔵甲骨卜辞》⁽²⁰⁾などでヨーロッパの博物館に収蔵された甲骨文の様子を知ることができる⁽²¹⁾。

甲骨に関する研究は、カリフォルニア大学バークレー校の教授として古代中国史を研究し、1975 年の雑誌 *Early China* の創刊に携わったディヴィッド・N・キートリーが第一人者である。キートリーは、*Sources of Shang History: the Oracle Bone Inscriptions of Bronze Age China*⁽²²⁾などの著作によって欧米に甲骨文研究を紹介した。彼の研究に特徴的なのは占卜の性質についての考察である。甲骨文には、「～すれば…するか、～しなければ…しないか」という肯定・否定の条件の両方が刻字された「対貞」という形式の卜辞が見られる。これは占卜の形式としてはやや不自然であり、殷人の何らかの意図が示されていると思われる。また、鑽と鑿と呼ばれる穴を甲骨に施すことで、甲骨に生じる卜兆がある程度コントロールされていること、そして「貞」字には本来「占う」あるいは「問う」といった意味合いは無いことなどから、甲骨占卜はいわゆる「占い」ではなく、人間がその意思を神々に伝え、それを叶えてもらう儀式だったのではないかと述べている⁽²³⁾。

キートリー以後の研究としては、ロバート・エノの“Shang State Religion and the Pantheon of Oracle Texts”⁽²⁴⁾が殷代末における占卜とそこに現れる靈的存在について論じている。その他、エドワード・L・ショーナシーなど甲骨文を研究する学者は存在するが、研究の重心は西周以降の時代に置いている印象があり、甲骨文研究者と呼ぶより古代中国研究者と呼ぶべきであろう。それゆえに、未だにキートリーの業績は、欧米の甲骨文研究において重要であり続けているといえよう。

2-2 綴合・断代・字积等の研究

甲骨文は 3000 年以上前の遺物であるから、当然完全な状態で出土するものは少なく、また文字も現在の漢字とは大きく異なる形で記されているため、資料として用いるには一定の作業が必要になる。例えば拓本化して整理することなどはその第一歩であるといえよう。ここでは大きく、①破砕した状態で出土した甲骨片を繋ぎ合わせて本来の骨片を再現する綴合研究、②どの王の時代に作成された甲骨文かを確定する断代研究、③文字の隸定および釈読を行う字积研究、の 3 つを取り上げて簡単に紹介する。

破砕した甲骨文を文字通り綴り合わせて本来の骨片を再現する綴合研究は、こうした資料整理的研究の中でも重要なものであるといえよう。綴合によって甲骨そして甲骨文をより完全な形の文章として把握することがいかに研究上大きな意義を持つかは、説明するまでもないことである。この綴合研究は甲骨文の発見当初から行われており、《甲骨文合集》以前には曾毅公などが精力的に取り組んでいたが、《甲骨文合集》で甲骨文ごとの時期区分がされたことや、比較的文意が近い甲骨文がまとめられて収録されたことなどにより、飛躍的に研究が進んだ。代表的な研究成果としては蔡哲茂《甲骨綴合集》⁽²⁵⁾や黄天樹《甲骨拼合集》⁽²⁶⁾などが挙げられ、その他にも多くの研究者によってその成果が報告されている。

断代研究については、董作賓の功績が大きかったことはすでに述べた。しかし、その代表的な成果である「五期分類」は後続の研究者から様々な批判を受けて再検討されることとなった。具体的には第 4 期、武乙・文丁の時代のもつとされた「歴組」が特に議論の中心となった。既に 1950 年代には島邦男らによって董作賓の研究の矛盾が指摘されていたが、中国でも 1980 年ごろから裘錫圭の〈論歴組卜辞的年代〉⁽²⁷⁾などでこの矛盾の解消が本格的に論じられるようになり、その他にも李学勤、黄天樹、林漢達、彭裕商らの研究者たちがこの課題に取り組んだ。彼らによって、この歴組甲骨は第 1 期武丁時代と第 2 期祖庚・祖甲時代の間位置する時代のものであると断代された。ただし、この議論は他の時期の甲骨文の断代にも影響するものであり、未だに異論も存在する。また、殷王室の世系についても、複数の王統が存在したと考えられることが張光直〈商王廟号新考〉⁽²⁸⁾などで指摘されて以来、断代において基準となる殷王の系譜自体にも数多くの説が提出されており、確定するには至っていない。このように断代や世系についての議論は現在でも決着が見えない状況にある。日本人では落合淳思が「甲骨祭祀と歴組の断代」⁽²⁹⁾や「殷末曆譜の復元」⁽³⁰⁾などで断代と年譜復元に取り組んでいる他、崎川隆《賓組甲骨分類研究》⁽³¹⁾などの研究が、断代研究の例として挙げられるだろう。

甲骨文の隸定と釈読は、姚孝遂主編、肖丁副主編の《殷墟甲骨刻辞摹释总集》⁽³²⁾と《殷墟甲骨刻辞類纂》⁽³³⁾が第一に挙げられる。これは《甲骨文合集》に収録された甲骨文の积文をまとめたものであり、元の字体が各文に対応する形で示されている点が非常に有用である。その他、1999 年には《合集》の中心的編者の 1 人であった胡厚宣が主編となって《甲骨文合集积文》⁽³⁴⁾が出版されており、2010 年には陳年福が《殷墟甲骨文摹释全編》⁽³⁵⁾を出版するなどしている。隸定・釈読の作業は現在でも継続的に研究がされているものであり、同時に終わりのない古文字研究の宿命でもあろう。釈読の定まっていなかった文字についての説を集めた字积集としては松丸道雄主編『甲骨文字字釋総覧』⁽³⁶⁾や于省吾主編《甲骨文字詁林》⁽³⁷⁾があり、過去 100 年近くの字积研究の活動が収められて

いる。文字学的な研究としては、鈴木敦が《甲骨文編》における「文字域」、つまり同じ文字と定義できる範囲の問題に取り組んだ⁽³⁸⁾他、落合淳思が明確に別字と判別できるもの以外は同じ字種とすることで、字種の統合に挑戦した「甲骨文字の字種整理」⁽³⁹⁾を発表するなどの研究が存在する。

綴合や断代、字釈といった資料整理研究はなお盛んであり、特に中国では博士論文レベルでも膨大な研究報告がある。また後に紹介する、近年研究者の注目を集めている新出土甲骨においても、こうした資料整理研究は重要な意義を持っており、資料整理の完成は今しばらくの時間を必要とするであろう。

2-3 祭祀・占ト・神など宗教的内容に関する研究

甲骨文は占ト行為を記した文であり、その占ト行為に用いられた文であるから、そこには宗教的内容が当然含まれるし、それ自体として宗教的な性格を帯びた文であり、遺物である。ここでは甲骨文のこうした宗教的性格に焦点を当てた研究を紹介し、甲骨文研究の宗教学的の可能性を示したい。

こうした研究で最も多いのは、やはり祭祀制度に関する研究であろう。赤塚忠は先述の通り、『甲骨学』誌上で祭祀制度に関する研究を発表しており、1977年には『中国古代の宗教と文化』⁽⁴⁰⁾を著した。伊藤道治もまた祭祀制度についての研究が多く、「殷代における祖先祭祀と貞人集団——殷王朝の構造-1」⁽⁴¹⁾などをはじめ、多くの研究が存在する。また、池田末利は「ト辞寮祭考」⁽⁴²⁾や「商末上帝祭祀の問題——享祀説の批判と不享祀の原因」⁽⁴³⁾などで当時の祭祀制度と祭祀対象となった神の性質についての論考を行っている。これらは《甲骨文合集》以前、あるいは発刊直後に発表された研究であり、当初から研究者の関心を強く引いていたことが窺える。

占ト行為についての研究としては、落合淳思が占ト方法の復元に取り組んだ研究をいくつか発表し、著書『殷代史研究』⁽⁴⁴⁾にまとめているものがある。ト辞に着目した研究としては高嶋謙一「殷代貞ト言語の本質」⁽⁴⁵⁾などがあり、また、陳捷「商代信仰世界における甲骨の意義」⁽⁴⁶⁾などは、占トの材料としての甲骨が持つ宗教的意義を検討している。平井博はこれら甲骨文自体が備える宗教的要素について注目が集まることは少なかったと「殷代における占トとト辞の位相」⁽⁴⁷⁾において指摘し、占トという行為、そしてそれを文字として記録したことから殷人の宗教的観念を読み解く試みをしている。こうした甲骨文の宗教的遺物としての性格についての研究は、宗教学においても検討されるべき課題であろう。

中国では、五祀周祭制度を研究した許進雄の《殷ト辞中五種祭祀的研究》⁽⁴⁸⁾、常玉芝《商代周祭制度》⁽⁴⁹⁾、甲骨文に見える信仰や神々などについて論じた具隆会《甲骨文与殷商時代神靈崇拜研究》⁽⁵⁰⁾、孟欣《商代地祇神話研究》⁽⁵¹⁾、尹彰浚《从甲骨文研究看商代文化——与考古学、神話伝説与古文献結合》⁽⁵²⁾、甲骨文研究の歩みを振り返りつつ総合的に検討した王宇信《甲骨学一百年》⁽⁵³⁾や朱鳳瀚による殷代研究⁽⁵⁴⁾などが存在している。また、先行研究の目録として、宋鎮豪編《百年甲骨学論著目》⁽⁵⁵⁾がある。

3. 新出土甲骨文の研究

3-1 西周甲骨

従来殷王朝に特有のものであると考えられていた甲骨文であったが、1950年代から、陝西省など

殷墟からは離れた場所で数点の甲骨片が断続的に発見された。いずれも鑽鑿形態などにおいて殷墟出土の甲骨とは異なる特徴を備えたものであり、殷末から西周初期の遺物と推測された。そして1977年、陝西省扶風県鳳雛村南西周甲組宮殿遺址の西廂2号房内H11号及びH31号窖穴より甲骨17,000片（うちト甲16,700片、亀腹甲300片余、牛肩胛骨290片余）が出土。その鑽鑿の形態や字形などから殷末周初の遺物と断代された。出土地やその卜辞の特徴から、これは殷末期、殷の方国（属国）であった頃の周の遺物であると断じられ、両王朝の交代期の貴重な資料として重宝されることとなった。これらの発見は陝西周原考古隊の〈陝西岐山縣鳳雛村發現周初甲骨〉⁽⁵⁶⁾と題した報告によって、大きな衝撃とともに世に広められた。日本では雑誌『古史春秋』で浅原達郎が「周原甲骨一覧表」を1984年に発表し、欧米ではショーナシーが“Zhouyuan Oracle-Bone Inscriptions: Entering the Research Stage?”⁽⁵⁷⁾を1985年に発表しているように、中国国外でもこの発見は大きな注目を浴びた。この周原甲骨の研究には王宇信、徐錫臺、陳全方といった研究者たちが取り組み、王宇信《西周甲骨探論》⁽⁵⁸⁾、徐錫臺《周原甲骨文綜述》⁽⁵⁹⁾、陳全方《周原與周文化》⁽⁶⁰⁾などが周原甲骨研究の重要な成果として挙げられる。1997年に朱歧章が《周原甲骨研究》⁽⁶¹⁾を著し、2002年には曹璋が《周原甲骨文》⁽⁶²⁾を発表するなど、周原甲骨の整理・釈読・断代に関する研究は一定の成果を挙げているとあって良いであろう。

周原甲骨は字風や鑽鑿形態といった形式面以外にも特徴的な部分が多い。例えば周公の廟の遺址から出土したにもかかわらず、周との血縁関係を持たない殷王を祭祀対象としているものが存在するが⁽⁶³⁾、これは祖先祭祀を中心としたと考えられる当時の中国の祭祀体系からすれば奇妙な現象であり、研究に値する特性であるといえる。しかしながら、周原甲骨は非常に細かく破砕した状態で出土したものが多く、また刻み込まれた文字も非常に小さく、それゆえに判読が困難かつ、文全体のコンテキストが把握しにくい、また文例・句例の収集が困難である、といった問題が存在しており、そのためか、日本においてこうした周原甲骨の特徴的な性質や内容について検討した研究は、ごくごく僅かではない。こうした問題は総合研究や文字研究によって解消されるべきであり、実際にいくつかの研究例も存在しているが、未だ決定的と呼べる成果は管見の限り見当たらない。

3-2 花園莊東地甲骨

《甲骨文合集》以降も殷墟での発掘調査は継続され、1973年に7,000片余りが出土した小屯南地の甲骨などが報告されていたが⁽⁶⁴⁾、内容・形式面等で従来の殷墟甲骨の特徴を大きく外れるものではなかった。しかし1991年、小屯村殷墟遺跡から東南1キロばかりの花園莊東地から甲骨1,583片が出土し、うち689片が有字甲骨であり、かつ破砕片ではなく完全な状態の甲骨が多く出土した。この時発見された甲骨は中国社会科学院考古研究所編《殷墟花園莊東地甲骨》⁽⁶⁵⁾に収録されたが、このわずか3年後の2006年には姚萱《殷墟花園莊東地甲骨卜辞の初歩研究》⁽⁶⁶⁾が出版され、95編もの研究論文の目録が掲げられるほどの活況を示すこととなった。

この花園莊東地甲骨がこれほどまでに研究者からの注目を浴びた大きな理由は、これがいわゆる「非王卜辞」であると考えられたからであった。かつて董作賓の断代及び殷王の曆譜復元においては、甲骨文は殷王の主宰による王朝内での公的占トであるとされたが、これに対して陳夢家や伊藤道治、李学勤⁽⁶⁷⁾ら多くの研究者が異論を唱え、一部の甲骨文は殷王による占トではなく、殷の王族または高位貴族による占トであり、殷王朝の公的な占トに属しないとされた。これが「非王卜辞」

あるいは「非王卜辞」と呼ばれる甲骨文であり、林澐の研究⁽⁶⁸⁾などが存在する。花園荘東地甲骨は卜法や卜辞に従来の甲骨文とは異なる特徴を有し、特に占卜者が「子」、占卜対象が「丁」にほぼ限定されている点などから、まさにこの「非王卜辞」であると考えられた。従来から殷の王族は十干称谓を冠する複数の氏族によって構成されており、この氏族間で王統の交代が行われていたとする説が張光直など⁽⁶⁹⁾によって唱えられていたが、この花園荘東地甲骨はこうした殷王族内の氏族構造を知るための重要な資料であるといえ、より正確な殷代の王朝構造の理解への一助となりうるものである。2017年には花園荘東地甲骨の文編である《殷墟花園荘東地甲骨文字編》⁽⁷⁰⁾が発行されるなど研究資料としての整理も進んできており、日本でもより一層の研究が求められるだろう。

4. おわりに

4-1 甲骨文研究の現在

近年の古代中国研究では、いわゆる「改革・解放」以降の開発に伴って進められた発掘調査や、同時に行われた盗掘行為によって、郭店や包山をはじめとする戦国竹簡などの新出土資料が文献資料としての質、量、そして保存状態等の諸条件が非常に良好な状態で相次いで発見されたこと、また二里头文化の発見・発掘が進んだことなどの要因から、甲骨文、あるいは殷代研究以外の分野も含めて大きな盛り上がりを見せている。むしろ、こうした新資料・新発見が研究者の関心を強く惹きつけ、必然的に古代文字研究・出土資料研究・古代中国研究の対象が戦国竹簡などの新資料へと移っている面があることは否めないであろう。「中国」への関心を持つ歴史学・考古学・文字学などの分野においてさきそうといった状況であるから、宗教学における甲骨文への関心は言わずもがな、といったところである。しかし、だからといって甲骨文研究の重要性が相対的に下がっている訳ではなく、また決して研究活動が下火になっているわけではない。むしろ、今日の甲骨文研究は多くの課題と、そして可能性に満ちているというのが筆者の考えである。

本論文で紹介してきたように、中国において甲骨文研究は、現在でも依然盛んであり続けている。2-3の末尾で述べたように、中国での甲骨文関連の研究は、博士論文等も含めて実に膨大な数に上っているし、また日本でも、1990年代後半に甲骨文発見100周年に向けて李学勤らを招いたシンポジウムが開催されたり、雑誌『しにか』上で甲骨文研究についての特集が組まれる⁽⁷¹⁾などしており、全体の傾向として甲骨文研究は再び盛り上がりつつあるといえるであろう。実際、今回のサーヴェイで参考にした『史学雑誌』の「回顧と展望」号「中国——殷・周・春秋」の項では、甲骨手を扱った論文・著作等は、1980年代半ば頃から毎年およそ1~2本となり、1984年の当該号では「昨年は残念ながら甲骨文に基づく殷代史研究はみあたらなかった」⁽⁷²⁾と記されるほどになるが、1990年代には徐々に取り上げられる論文・著作等は増加する傾向に転じ、2000年代・2010年代には5本以上の論文・著作等が取り上げられることもしばしばである。もちろん、「回顧と展望」号は網羅的な研究の紹介がされているわけではなく、毎年執筆担当者ごとにも紹介される論文の傾向に多少の偏りが存在することは否めないが、甲骨文への研究者の関心のあり方ある程度反映していることは確かであろう。

4-2 甲骨文研究の課題と宗教学における研究の可能性

こうした状況の中で、《甲骨文合集》以前に発見された甲骨文に対して行われた（行われ続けている）綴合・断代・字釈といった基礎的な資料整理は、《甲骨文合集》以降に発見された甲骨の蓄積や、西周甲骨、花園莊東地甲骨などの新出土甲骨文においてより一層重要性を増しているといえるし、またこうした資料整理の成果が広く共有されてきたことや、新出土甲骨文から新たな情報と知見が数多くもたらされたことによって、先行研究への批判と再検討の可能性を多分に秘めているといえる。一方で、特に西周甲骨をはじめとする新出土資料の研究は、日本ではほとんどが資料整理や中国での研究の紹介にとどまっているというのが筆者の所感であり、これらの新資料に対してその内容や性質に踏み込んだ研究が少ないことは現在の甲骨文研究の最たる課題の1つであろう。

周原甲骨や花園莊東地甲骨などは既に述べた通り、古代中国の宗教史研究において重要な意義を持ち、また祭祀・占ト・呪術・神話といった宗教研究の主要なモチーフを備えた資料であるから、この課題に回答すべき主要な学問の1つが宗教学であるといつて差し支えなからう。現状では宗教学における甲骨文への注目度はさほど高くないが、歴史学・考古学・文字学など様々な学問分野を横断して研究対象とされる甲骨文は、様々なディシプリンを用いて営まれる宗教学と親和性が高い資料であるとも考えられる。特に、甲骨文をいわゆる中国学の分野に閉じた資料として扱うのではなく、その備える祭祀・占ト・呪術・神話といった要素を通時的・通文化的に比較研究を行うことなどは、まさに宗教学が果たすべき役割であろう。

註

- (1) CNKI (中国学術文献オンラインサービス), http://www2.chuo-u.ac.jp/library/db_cnki.html, 最終アクセス 2020/2/5。
- (2) 王国維：〈殷ト辞中所見先公先王考〉，《觀堂集林》卷9，1917。
- (3) 董作賓著，李濟・梁思永編：《小屯 第二本 殷虚文字甲編》，台湾：中央研究院歴史語言研究所，1948。第1次～第9次の殷墟発掘で得られた甲骨を収録している。
- (4) 董作賓著，李濟・梁思永編：《小屯 第二本 殷虚文字乙編》，台湾：中央研究院歴史語言研究所，1948。127坑を含む第13次～第15次発掘で得られた甲骨を収録している。なお，1993年に，初刊本にあった誤りを訂正し，歴史語言研究所の元拓を収録して再刊された。
- (5) 張秉權著，李濟・石璋如・高玉尋編：《小屯 第二本 殷虚文字丙編》，台湾：中央研究院歴史語言研究所，1957。127坑出土甲骨の綴合・注釈が行われた。
- (6) 董作賓：〈甲骨文断代研究例〉，《慶祝蔡元培先生六十五歳論文集1》，台湾：中央研究院歴史語言研究所，1933。
- (7) 董作賓：《殷曆譜》，台湾：中央研究院歴史語言研究所，1945。
- (8) 陳夢家：《殷虚卜辞綜述》，北京：科挙出版社，1956。
- (9) 中国社会科学院考古研究所編：《甲骨文編》，上海：中華書局，1965。
- (10) 李孝定編：《甲骨文字集釋》，台湾：中央研究院歴史語言研究所，1970。
- (11) 嚴一萍：《甲骨綴合新編》，台湾：藝文印書館，1975。
- (12) 嚴一萍：《甲骨綴合新編補》，台湾：藝文印書館，1977。

- (13) 中国社会科学院歴史研究所編：《甲骨文合集》，上海：中華書局，1977-1982。
- (14) 中国社会科学院歴史研究所編：《甲骨文合集補編》，北京：語文出版社，1999。
- (15) 林泰輔「清国河南省湯陰県発見の亀甲牛骨に就きて」、『史学雑誌』第20巻8・9・10号，1909年。
- (16) 林泰輔『亀甲獣骨文字』，西東書房，1917年。日本に輸入された甲骨1,023片を収録したものである。
- (17) 島邦男『殷墟卜辞研究』弘前大学文理学中国研究会，1958年。
- (18) 島邦男『殷墟卜辞綜類』増訂版，汲古書院，1971年。
- (19) James M. Menzies, *Oracle Records from the Waste of Yin*, Shanghai, Kelly and Walsh (明義士：《殷墟卜辞》)，1917。
- (20) Frank H. Chalfant draw, Roswell S. Britton ed., *The Couling-Chalfant Collection of Inscribed Oracle Bone*, Shanghai, Commercial Press (美國方法斂摸，美國白瑞華校：《庫方二氏蔵甲骨卜辞》)，上海：商務印書館)，1935。
- (21) シャルフアンとブリトンによる著録は，上掲書の他，*Seven Collections of Inscribed Oracle Bone* (《甲骨卜辞七集》，1938年)，*The Hopkins Collection of Inscribed Oracle Bone* (《金璋所蔵甲骨卜辞》，1939年)があり，この3冊をまとめた *Three Treatises on Inscribed Oracle Bone* (《方法斂摹甲骨卜辞三種》，台湾：藝文院書館，1966)でも確認できる。
- (22) David N Keightley, *Sources of Shang History: The Oracle Bone Inscriptions of Bronze Age China*, Berkeley, University California Press, 1978。
- (23) 池澤優「宗教学理論における新出土資料——聖俗論と仲介者概念を中心に」(『中国出土資料研究』第6号所収，2002年，55-73頁)でも，この甲骨占卜の性質についてキートリーの論を引用しながら詳しく論じられている。
- (24) Robert Eno, “Shang State Religion and the Pantheon of the Oracle Texts,” in *Early Chinese Religion: Part One: Shang through Han (1250 BC-220 AD)*, ed. John Lagerwey and Marc Kalinowski, Leiden, Brill, 2009。
- (25) 蔡哲茂：《甲骨綴合集》，台湾：楽学書局，1999。
- (26) 黄天樹：《甲骨拼合集》，北京：学苑出版社，2010。
- (27) 裘錫圭：〈論歷組卜辞的年代〉，《古文字研究》六，1981。
- (28) 張光直：〈商王廟号新考〉，《中央研究院民族学研究所集刊》15，1963。
- (29) 落合淳思「甲骨祭祀と歴組の断代」、『史林』83巻4号，2000年，664-690頁。
- (30) 落合淳思「殷末曆譜の復元」、『立命館文学』577号，2002年12月，340-402頁。
- (31) 崎川隆：《賓組甲骨分類研究》，上海：上海人民出版社，2011。
- (32) 姚孝遂主編，肖丁副主編：《殷墟甲骨刻辞摹积總集》，上海：中華書局，1988。
- (33) 姚孝遂主編，肖丁副主編：《殷墟甲骨刻辞類纂》，上海：中華書局，1989。
- (34) 胡厚宣主編：《甲骨文合集积文》，北京：中国社会科学出版社，1999。
- (35) 陳年福：《殷墟甲骨文摹釋全編》，北京：線装書局，2010。
- (36) 松丸道雄主編『甲骨文字字釋總覽』東京大学東洋文化研究所，1993年。
- (37) 于省吾主編：《甲骨文字詁林》，上海：中華書局，2017年。

- (38) 鈴木敦「甲骨文字における“文字域”の設定——「甲骨文編」の検討を通じて」(『茨城大学人文学部紀要 コミュニケーション学科論集』1号, 1997年3月, 219-231頁), 『甲骨文編』における採字方法の検討(『茨城大学五浦美術文化研究所紀要』5巻, 1998年, 107-113頁), 『甲骨文編』における大文字域の分析(『茨城大学人文学部紀要』人文学科論集40号, 2003年9月, 1-19頁), 「甲骨文字における基礎文字群の設定」(『中国考古学』第4号, 2004年11月, 125-140頁)など。
- (39) 落合淳思「甲骨文字の字種整理」, 『立命館文学』633号, 2013年11月, 209-221頁。
- (40) 赤塚忠『中国古代の宗教と文化』角川書店, 1977年。
- (41) 伊藤道治「殷代における祖先祭祀と真人集団——殷王朝の構造-1」, 『神戸大学文学部研究』第28号, 1962年3月。
- (42) 池田末利「卜辞祭考」, 『甲骨学』12号, 1980年8月。
- (43) 池田末利「商末上帝祭祀の問題——享祀説の批判と不享祀の原因」, 『東洋学報』73号1・2巻, 1992年1月, 1-30頁。
- (44) 落合淳思『殷代史研究』朋友書店, 2012年。
- (45) 高嶋謙一「殷代貞卜言語の本質」, 『東京大学東洋文化研究所紀要』110号, 1989年, 1-16頁。
- (46) 陳捷「商代信仰世界における甲骨の意義」, 『漢字文化研究年報』第3輯, 2008年。
- (47) 平井博「殷代における占トと卜辞の位相」, 『首都大学東京教職課程紀要』第1号, 2017年1月, 1-23頁。
- (48) 許進雄:《殷卜辞中五種祭祀的研究》, 台湾:国立台湾大学文学院, 1968。
- (49) 常玉芝:《商代周祭制度》, 北京:中国社会科学出版社, 1987。
- (50) 具隆会:《甲骨文与殷商時代神靈崇拜研究》, 北京:中国社会科学出版社, 2013。
- (51) 孟欣:《商代地祇神話研究》, 河北師範大学博士論文, 2018, 7。
- (52) 尹彰淩:《从甲骨文研究看商代文化——与考古学, 神話伝説与古文献結合》, 《殷都学刊》第2期, 2019。
- (53) 王宇信:《甲骨学一百年》, 北京:社会科学文献出版社, 1999。
- (54) 朱鳳瀚:《商周家族形態研究》(天津:天津古籍出版社, 初版1990, 増訂版2004), 《殷墟卜辞所見商王室宗廟制度》(《歴史研究》1990年第6期所収), 同:《商周時期的天神崇拜》(《中国社会科学》1993年第4期所収)などが挙げられる。
- (55) 宋鎮豪:《百年甲骨学論著目》, 北京:語文出版社, 1999。
- (56) 陝西周原考古隊《陝西岐山縣鳳雛村發現周初甲骨文》, 《文物》第10期, 1979。
- (57) Edward L. Shaughnessy, “Zhouyuan Oracle-Bone Inscriptions: Entering the Research Stage?” in *Early China*, Vol. 11, 1985.
- (58) 王宇信:《西周甲骨探論》, 北京:中国社会科学出版社, 1984。
- (59) 徐錫臺:《周原甲骨文綜述》, 西安:三秦出版社, 1987。
- (60) 陳全方:《周原與周文化》, 上海人民出版社, 1988。
- (61) 朱歧章:《周原甲骨研究》, 台湾学生書局, 1997。
- (62) 曹璋:《周原甲骨文》, 北京:世界図書出版公司, 2002。
- (63) 〈H11:1〉27:1片などが典型的である。

- (64) 《小屯南地甲骨》(中国社会科学院考古研究所編, 上海: 中華書局, 上冊 1980, 下冊 1983) など。
- (65) 中国社会科学院考古研究所編:《殷墟花園莊東地甲骨》, 雲南人民出版社, 2003。
- (66) 姚萱:《殷墟花園莊東地甲骨卜辞的初步研究》, 北京: 線装書局, 2006。
- (67) 陳夢家:《殷虚卜辞綜述》; 伊藤道治『中国古代王朝の形成』(創文社, 1975年); 李学勤〈殷虚五号墓座談紀要〉(『考古』1977年第5期所収) など。
- (68) 林漢達:〈從武丁時代的幾種「子卜辞」試論商代的家族形態〉,《古文字研究》一, 1979。
- (69) 張光直: 前掲書。他に持井康孝「殷王室の構造に関する一試論」(『東洋文化研究所紀要』第82冊所収, 1980年3月) や, 松丸道雄「殷人の觀念世界」(『甲骨文の話』所収, 大修館書店, 2017年) などこの説に触れている。
- (70) 朱添:《殷墟花園莊東地甲骨文字編》, 黒龍江大學出版社, 2017年。
- (71) 1999年4月の『月刊しにか』第4集にて「甲骨文字の世界——發見100周年・古代文字への挑戦」と題した特集が組まれた。
- (72) 江村治樹「東アジア——中国——殷・周・春秋(1983年の歴史学会——回顧と展望)」『史学雑誌』第93巻5号, 1984年5月, 182頁。